

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学生のけんかに見る”ポーズ意識”についての一考察
Author(s)	石本, 栄; 飯住, 良夫
Citation	児童の言語生態研究 , 11 : 19 - 27
Issue Date	1982-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045122
Right	
Relation	



小学生のけんかに見る「ホーズ意識」についての「考察」

石本 栄
飯住 良夫

一、はじめに

けんか

(男児八才児 K・M 54・3・1)

きのう、ぼくは、一年のO君とけんかをしました。でも、なかなか泣かないから、首を前にして、かみの毛を後ろにしたら泣きました。自分が泣いたからって、ぼくのわる口をいいました。

ぼくが、また、わる口をいったら、またけんかをするかもしれない。ぼくは、それがなんとなく気がなりません。

だから、けんかのれんしゅうをしないと、けんかでまけて、泣いてしまいます。れんしゅうする道

具は、はしらとつくえとかべです。それで、チョップしたり、キックしたりすれば、ぜったいかつじしんがあります。

もし、おおぜいできたら、ぶきをつくりまします。ぶきは、ゆみやとぼうとかいろんなものをよういすれば、いくらO君の友だちがいても、ぜったいにまけるはずがありません。

※後日談(このけんかについてのKとの会話)

T「M君。O君の方も君より絶対に強い方法を考えていると思うよ。そしてらどうする。」

M「そしたら、うーんと、もっと武器を作るよ。」

T「その武器よりも強い武器をO君が考えたら、どうするの。」

M「そうしたら、えーと、包丁でおどかすよ。」

T「それよりも強い方法を考えてきたらどうするの。」

M「そしたら、警察に言っつかまえてもらおうよ。」

T「それよりも、もっと強く出てきたらどうするの。」

M「そしたら、うーんと、えーと。天皇陛下に言って死刑にしたらうよ。」

T「それよりも、もっと強い方法を考えてきたらどうするの。」

M「えーと、えーと、えーとね。そうだ。O君のお母さんに言って叱ってもらおうよ。」

T「?!……………」

(以上、飯住採録)

この子に限らず、子どもにとってけんかは、遊びとともに重大な関心事である。関心の向け方も、この子のように「負けたくない。」「なんとしても勝ちたい。」という願望であったり、「勝つためには、どんな武器で、どんな手法で。」という技術的な苦心であったり、また、「けんかはこわい。」「けんかは嫌だ。」という心情的印象であったりする。

子どもたちにとって、人間にとって、けんかが重大な関心事であるということとはこれらの様々な形である関心の重大さは、好悪等をも含めてけんか行為に対して自らの身をどう処するかとい

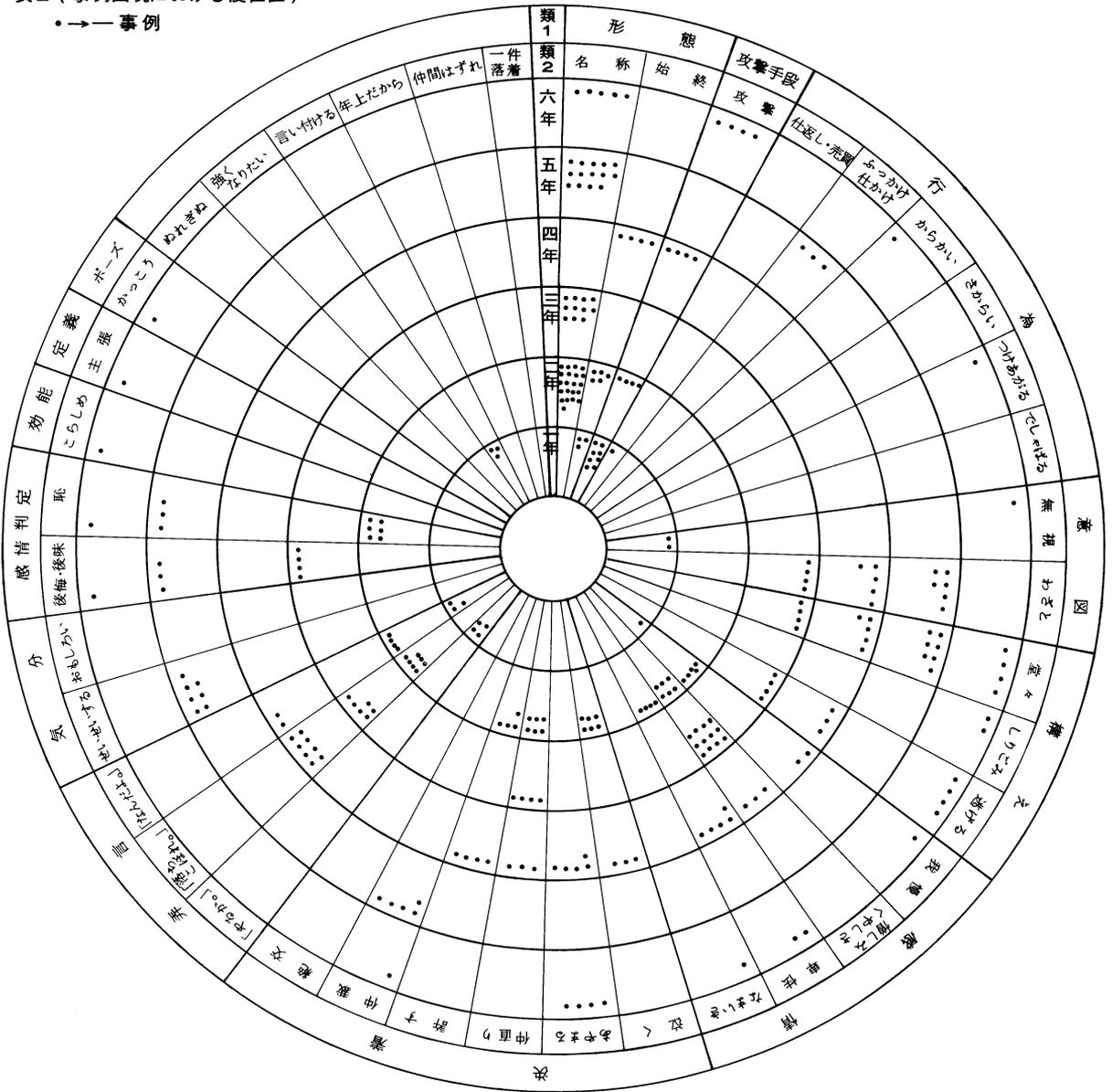
表I けんか水不足態に關する用語事例分類一覽

意 図	行 為				攻 撃 手 段		形 態		名 稱		期1	期2
	無視	さか	か	から	女	男	始	終	名	稱	年	年
わざと	無視	さか	か	から	女	男	始	終	名	稱	一	年
わざと	無視	さか	か	から	女	男	始	終	名	稱	二	年
わざと	無視	さか	か	から	女	男	始	終	名	稱	三	年
わざと	無視	さか	か	から	女	男	始	終	名	稱	四	年
わざと	無視	さか	か	から	女	男	始	終	名	稱	五	年
わざと	無視	さか	か	から	女	男	始	終	名	稱	六	年

決 着	感 情				構 元		期1	期2	
	あ	泣	な	卑	憎	羨	に	し	
あ	泣	な	卑	憎	羨	に	し	一	年
あ	泣	な	卑	憎	羨	に	し	二	年
あ	泣	な	卑	憎	羨	に	し	三	年
あ	泣	な	卑	憎	羨	に	し	四	年
あ	泣	な	卑	憎	羨	に	し	五	年
あ	泣	な	卑	憎	羨	に	し	六	年

表II (事例出現における優位性)

● → 事例



うことがせまられることにおいてのものであろうと思う。しかも、情動的にも生理的肉体的にも、ある種の緊張・弛緩を強いられながら、身の処し方をせまられているものと考えられる。

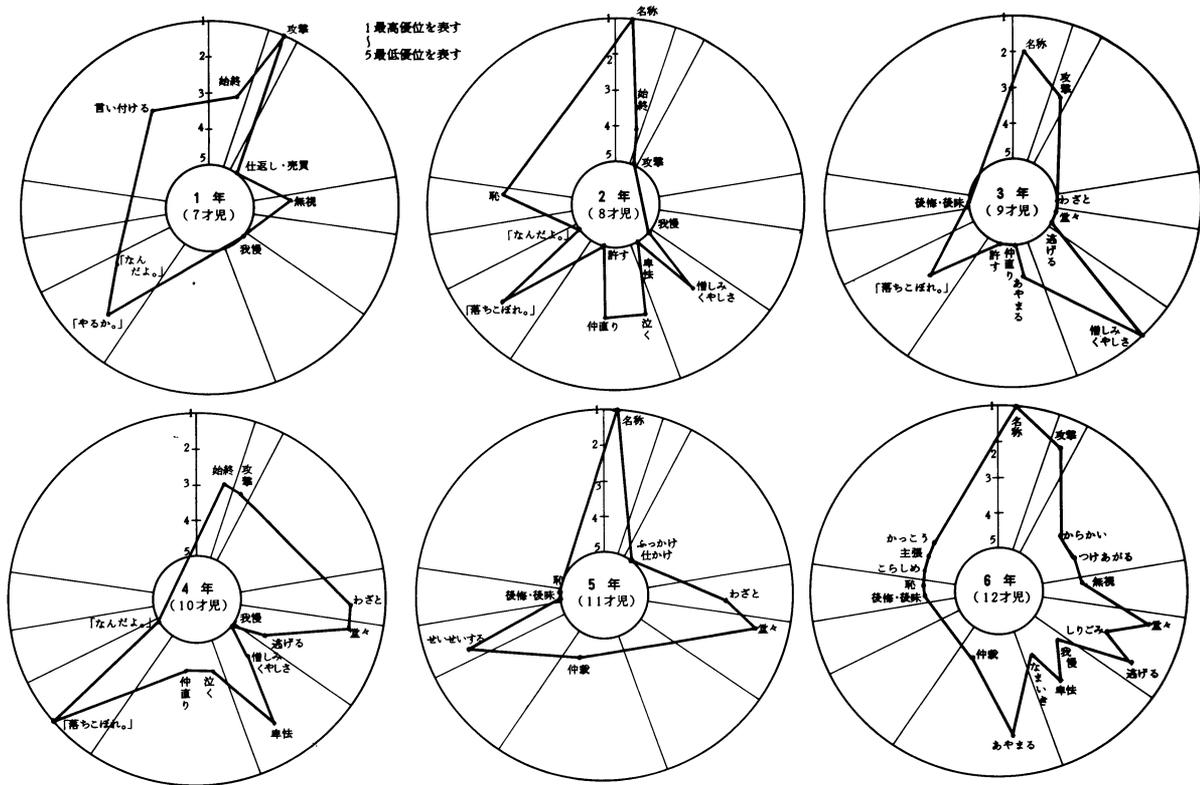
これらの関心が、ある種の緊張・弛緩の中で凝縮され、身の処し方というある方向性を示さなければならぬところに、こだわりや気取りなどというある様・構えをとらしめると考える。

そのある様・構えをとらしめようとするところに、ポーズ意識を見てとりそこに子どもたちの日常性の投影を見てとろうとするわけである。

従来、「けんか両成敗」「負けるが勝ち」「敵に背を見せるな」等々、教訓的な言辞を持って、子どものけんかは大人たちによって処されてきた。これら教訓的な言辞が、ある人間生をさぐり指摘していると思われるが、日常的には、善悪判定を中心とした決着論において扱われているように思われる。

しかし、けんかの渦中にいる子どもたちにとっては、この決着論的判定は、言われなき判定である場合もある。言われなきと感じるところに、決着の重要性を見出し、ひいては、けんか行為を、どう見てとってやるか、ととっているかという姿勢が、子育て上、大切な

事Ⅲ（事例出現の優位性の学年別状況）



課題となると思われる。

これらのポーズ意識の変容を見届け、子育ての上での一資料としたいというのが、本テーマを起こした所以である。

二、集計方法

子どもたちの書いた「けんかについて思うこと」の作文中より、けんかにおけるポーズを意識しイメージ化していると思われる言葉・文を抽出し、その類似性を頼りに類2を構成した。さらに類2の類似性をもって類1を構成した。その結果は表Ⅰの通りである。

次に、類2で各類毎に上位五位までを抽出し、さらにそれらの中で、学年内上位五位以内に残るものを抽出した。(表Ⅱ参照)

各類における事例出現の学年間・学年毎の優位性を見出し出したがための処理である。

さらに、こうして抽出処理されたものを各学年内での優位性に着目し、グラフ化した。各学年内の様相の特徴をとらえ、学年間の動きをも見てとりためたのである。その結果は表Ⅲ通りである。

三、集計結果についての考察

まず、一年生(七才児)におけるけんかについての意識は、「攻撃的手段」「やるか。」「言い付ける」に集中していることがわかる。

「攻撃的手段」に含まれる事例は、「とびかかる」「ちよっとぶつ」「髪の毛を引っばる」「すっとばす」「竹の棒を振り回す」「突き落とす」「にらむ」「引っこく」等があるが、これらは、六年生中でも数において一位を占めている。どうやって相手をやっつけるかに頭をめぐらし、さらに、「やるか。」「やるぞー。」「泣かしてやるぞ。」「そう簡単に泣かされるか。」のようにどんな言葉を駆使して相手に向かっていくかに知恵をめぐらせることに懸命であると言える。

しかし、以上の例のように直截的に相手に向かうだけでなく、「なんだよ。」「なんで。あなたにおねえちゃんがいるからってさ。」等のように決断でなく、やや間接的に気分を引きずって、けんかをするかしないか雰囲気を感じるかがう意識も付随して生まれていることにも注目しておきたい。

反面、感情的なぐずつきは少なく、けんかの決着意識は、もっぱら、「言い付ける」「パパに言っちゃう」「ママ

マに言ってやる」のように、他人頼みの傾向が強いことも、この学年の特徴とも言える。

換言すれば、一年生(七才児)におけるけんかは、言行ともに強さの誇示を具体的手段において考えようとするところでのみポーズをとろうとしていると言えるのではなからうか。勝敗や強弱の判断基準についての意識は薄く、自分が、けんか行為で言行ともにどのような手段がとれるかという意識を中心にしたポーズであろうと思われる。

実際には、六学年中最もよく「泣く」と思われるのに、彼ら自身には、そう強く意識されることではないということも興味深いところである。

名称的・形態的意識の芽生え

二年生(八才児)・三年生(九才児)の全体像を一年生(七才児)と比較して、特徴的に言えることのひとつに、名称的形態的な関心の強さがあげられる。

曰く、「すごいけんか」「変なけんか」「遊びげんか」「ふざげけんか」「言い合いっこ」「くり返しげんか」「(以上様態)」「口げんか」「ぶちげんか」「なぐりげんか」「じゃんけんげんか」「(以上手段)」「みんなの前のけんか」「学校でのけんか」「三対二の

けんか」「一対一のけんか」(以上立場)「やくそくしたけんか」「ちょっとげんか」「洋服のけんか」(以上原因・契機)「たたかい」「決とう」「大あばれ」「八つ当たり」等々であるが、このことは、一年生(七才児)では、「大げんか」「すごいけんか」(以上様態・程度)「口げんか」(以上手段)「うそげんか」(以上原因・契機)等の事例のみ上げられるのに比し、芽が一気に花開いた如く見える。

このことは、取りもなおさず二年生(八才児)のけんかについての意識の基盤の広さを示していると言える。

名称としてけんかの状態を総括的にとらえることと同時に、手段・様態・立場・契機等々の識別がうかがえることも興味深い。

この名称的形態的関心は、この後、三年生(九才児)、五年生(十一才児)、六年生(十二才児)においても優位を占めているが、三年生(九才児)では、「いいけんか」「悪いけんか」(善悪)「短いけんか」「長いけんか」(時間)「兄弟げんか」(立場・関係)「おっかなくてひがいのある遊びのようなもの」(定義)「すごいけんか」(程度)「まともなけんか」(真偽)等々が出現し、さらに五年生では、「集団リンチ」(立場・意図)「女の子同士のけんか」(立場・関係・性)「売られけんか」(契機・売買)「楽なけんか」(すぐころころと気が変わるけんか)「気分」(やるべきとがこわいけんか)「(後味)」「卑怯なけんか」(感情・構え・判定)等々が新しく出てきている。

これらの変容の様子は、たいへん興味をそそられるところであるが、ポーズ意識を見る際、他の関心の学年間の変容とも関連がありそうなので後の考察に含めることとする。

感情的関心—こだわりの出現—

二年生(八才児)・三年生(九才児)において、次に指摘できるのは、感情的関心—こだわり—の強さについてである。

感情的関心の中でも、「にくたらしくてたまりません」「にくたらしい」「くやしい」「殺したいぐらいくたらしい」「うらみをはらす」等の事例の如く、憎悪・くやしさをつのらせる感情が、「ごまかす」(手段)よりも優位を占めている。しかも、この感情が、「がまん」「がまん強い」(我慢)「ひきょう」「ひきょうもの」(卑怯)「資格」を引きずっている型で優位を占めていることは、この学年での感情制御とその処理の仕方よりも感情横溢ぶりにその意識が凝集していることを

思わせ興味深いところである。

さらに、これらの感情の関連の様相を、一年生(七才児)では取り上げられなかった恥意識(「お母さんにおこずかしい」「まけたらはずかしい」「ひやかされてはずかしい」)の出現ぶりと併せて考えると、より興味深く納得できる場所である。

この二年生(八才児)での感情的なこだわりが、三年生(九才児)ではますます助長され、憎悪・くやしさのみになる。我慢・卑怯等の判断もなく感情的なこだわりを専らとし、一年生(七才児)で苦心した攻撃的手段への苦心・意識も徐々に薄くなる。

このように感情的なこだわりを中心としたポーズが、一年生(七才児)と比較すると、一年生(七才児)では取り上げられなかった仲直り(「なかなくなる」「すくなくなる」「やっとなかよくなる」「なかなよしくしようね」)許す(「朝になってゆるす」「本当にゆるす」)等々の決着のつけ方・見通しをおぼろながら意識しながらのものであることは、次第階への成長を思わせる場所ではなからうか。

おぼろながらとするのは、「本当にゆるす」とは言いながら、「朝になったらゆるす」如く決着についての確た

る基準を持ったものではないからである。決着についてのポーズが、こういう意味でおぼろであるとするのである。

弄言の関心——擲揄・報復——

二年生（八才児）において指摘できる特徴は、「落ちこぼれ」のような弄言の関心の優位性の出現である。一年生（七才児）では、「やるか」「なんだよ。」とけんかの契機的・雰囲氣的関心であったのが、二年生（八才児）では、明らかに挑戦的であり擲揄的報復的言語の駆使への関心へと移行したと言える。

曰く、「やりやがったな」（契機—報復）「弱虫」「落ちこぼれ」（弱点あげつらい）「ちよれいよ」（擲揄）「いつも〇点のくせに」「頭が悪いくせに」（間接的感情擲揄—資格性）「その手にゃのらん」（報復—手法優位誇示）等々である。

一年生（七才児）では、けんか手段の具体的行動が優位であったものが、二年生（八才児）からは、弄言的な行動へと関心が移行していると思われるのもおもしろい。憎悪くやしさをつるらせながらも我慢し、決着をおぼろながら見通しながらも、いかにして言葉を弄するかの関心を中心にしてどんな形でけんかをしているかの意識の芽生え

が、この学年のけんかポーズ意識の特徴とは考えられないだろうか。

意図的関心——わざと意識——

三年生（九才児）で芽生え、四年生（十才児）・五年生（十一才児）で優位を占めていくのに、意図的関心——わざと意識——がある。

三年生（九才児）でのこの意識の芽生えが、我慢・卑怯（資格）を消滅させながら感情的なこだわり（憎悪・くやしさ）を鮮明にする中で見える。この芽生えが、さらに弄言的関心を二年生（八才児）よりやや弱めながらの型で見えないだろうか。感情的なこだわりを鮮明にしながら弄言的な行為にある意図を持たせると考えれば、この学年のけんかポーズ意識の特徴として認められよう。

この意図的関心——わざと意識——は、四年生（十才児）・五年生（十一才児）になってより明確な位置を獲得する。この明確な位置の獲得を、二～五年の感情的こだわりと弄言的関心の動きと併わせて考察してみたい。

三年生（九才児）においては、わざと意識が、憎悪・くやしさを優先し、弄言的関心を付随させながらの型で芽生えたのに対し、四年生（十才児）では、憎悪・くやしさの感情的なこだわり

りを弱めながらも、そのこだわりを情動的なぐずつきよりも、行為・手段の資格の問題としての卑怯論を優先させる型で、弄言的関心を優位にしていることが興味深い。

曰く、三年生（九才児）では、「おぼえてろ」（逃げ口上—捨てぜりふ）「今にぶっとばしてやるからな」（威嚇）「勝てっこないだろう」「くやしかったらかかってこい」（挑発）「とっておきの武器をやるか」（非常手段—威嚇）「泣きおとしはいけませんよ」（擲揄）

四年生（十才児）では、「つるっばげ」「のろま」（擲揄）「ほらもう泣いている」「へへ」（愚弄）「てめえ、泣かされてえのか」（威嚇）「いいーだ。泣くはずねえだろう。」（挑戦）「ぜったい百点だな」（威嚇—真贋）「弱くぶったのになよー。ぶって。」（言い訳）

等々の多岐にわたっている。この多岐であることは、弄言の意図においてのものであると三、四年生のわざと意識を比較することにおいて考えたいわけである。

その意図において多岐である、弄言的なふるまいのあり方は、けんか行動

そのものあり方が卑怯であるか否かを問われるポーズの取り方をするのが、四年生（十才児）の特徴とするのは、考察の飛躍がすぎようか。卑怯か否か、そのふるまい方が問われるがために、弄言的意図が多岐になると考えたいわけである。

このわざと意識が四年生（十才児）では、感情的なこだわりで資格が問われているのに対し、五年生（十一才児）では、感情的なこだわりを歯牙にもかけていないふうである。むしろ、五年生（十一才児）のわざと意識は、感情的なこだわりでなく、けんかを気晴し、終わったあとせいせいする、おもしろかったとする対象としてとらえている。けんかを、わざと仕かけ、気晴らしができればよしとするポーズが五年生（十一才児）においては見られる。そのため、名称や形態が再びポーズ意識に呼びさまされる。

「泣く」行為の判定

二年生（八才児）と四年生（十才児）で優位を占めている。

曰く、二年生（八才児）では、「泣かせてみたい」「泣く」「泣き虫」「泣かない」「すぐ泣くから」「泣きそうになる」

四年生（十才児）では、

「泣けばいいと思っただめ」「泣けば許されると思っている」「終わりは泣けばいい」

としている。二年生(八才児)では、自分が泣くか否かが問題であり、四年生では、泣くことが手段として適当であるか否かの判定基準の対象となっている。

このあたりの姿容についても、四年生のわざと意識の位置付けとの関連を思いたくなる。「わざと」「泣く」のはいけないとするポーズを見てとりたわけである。さらにこのポーズの意識は、感情的には、「単怯論」とともに構築されていると思われることにも注目しておきたい。

感情的自己判定

— 恥から後味・後悔へ —

この類に属するものとして、二年生(八才児)では、「恥」、三年生(九才児)五年生(十一才児)六年生(十二才児)では、「恥」及び「後味・後悔」がある。

二年生(八才児)で「おこられてはすかしい」「見られてはすかしい」「負けたらはずかしい」としていたものが三年生(九才児)では、「後悔する」「けんかの後はとても気持ちが悪い」「あとで後悔する」「絶交はいいこと

ではない」、五年生(十一才児)では、「後味が悪い」「あとがこわくなる」「しなきゃよかった」六年生(十二才児)では、「ふがいない」「すんだことをぐちぐち言う」としている。

二年生(八才児)で感情的なはずかしさとしてとらえているものが、三年生(九才児)では、「後悔」、五年生(十一才児)では、「後味」「しなきゃよかった」のように、はずかしさのみでなく、後悔という行為に照明をあて、「しなきゃよかった」と、行為そのものに判定を下し、さらに、六年生(十二才児)では、「ふがいない」と

し、後悔の行為を越え、けんか行為の力量的優劣あるいは、自己の振舞いそのものの善悪基準の優劣性をもその意識の対象としているところを指摘しておきたい。後悔やふがいないととらえることは、はずかしいのようにはけんか行為に埋没した感情的なこだわりでなく、けんか行為をひとつの対象としてとらえ、客観視できる立場をとろうとしている姿勢を見るのである。ここに六年生(十二才児)あたりのポーズ意識のよりどころを見てみたいのである。

構え意識の変容

— かつこうをつける —

けんかに対する態度決定の類を見る

と、「堂々」「しりごみ」「逃げる」がある。それぞれの動きを見てみると、二年生(八才児)までは優位性に出現していないものが、三年生(九才児)になって出現し、「堂々」という態度志向については、四年生(十才児)からは、堂々とその位置を確保している。しかも、「逃げる」という消極的態度決定が流動的に出現しているに比し、積極的、志向的態度と見られる「堂々」の位置付けは、確たるものを感じる。

曰く、三年生(九才児)では、

「堂々とかかっていく」「やるかぎり勝つ」「応援してもらって勝つ」

「ずるがしこい考えで勝つ」

四年生(十才児)では、

「堂々とけんかする」「けりをつけなければならぬ」「最後までけんかする」「決着がつくまでけんかする」「泣きながらでもけんかする」

である。「ずるがしこい考えで」でも、「決着がつくまで」「泣きながらでも」けんかし、いったん始めたら、「けりをつけなければならぬ」、あくまで「勝たなければならぬ」のであり、それが、彼らの「堂々」の意識の前身であり、仕組みであるのであろう。感情が目いっぱいふくれ上がり、その緊張した欲求度が目いっぱい満足し、消化

されるまでたたくのが、堂々であると考えられ、そこに感情と密着した姿勢を見る。感情的なこだわりから抜け出ようとすればするほど、より密着してしまおうというように思える。だからこそ、「逃げる」手段は、徹底的に用意周到よろしく整えておくということになるのではなからうか。

しかし、この姿勢は、五年生(十一才児)になると、「どうせやるなら」と開き直りを見せ、「ようしやなく」相手の状況かまわずに、「たたき直してやる」「ぐらいいの気持ちを持つのが「堂々」であるとなる。「どうせ」の開き直りの以前に、「逃げる」「避ける」方法として「笑ってごまかし」「頭を使って」おくこともふまえている。だからこそ、いったん始めたら、「ようしやなくやる」ことになり、「たたき直す」ことになる。その行為を始める決断において開き直りであると五年生(十一才児)の「堂々」の意識の前身

・仕組みを考えたいのである。六年生(十二才児)になると、これがさらに、「強がり」となり、「どうしてもやらなければならぬ場合はやる」、つまり、「意味のあるけんかじゃないといけない」のであり、意味や意義を見つけたけんか行為は、「多少のぎせいもしかたがない」と考え、こ

の意義が見つけれられない、いわば大義

名分の立たないけんか行為は、「強がり」にすぎないものとなる。これが、

彼ら六年生（十二才児）の「堂々」意識であろう。強いて言えば、大義名分

が立たず、またそれにおいて敗北しそうな時には、「人をたててにげる」「ごまかしてにげる」「負けそうになるとにげる」「いやみを言ってにげる」のように、逃げ方もなんとなく姑息に見えるのは、大義名分の成否によるからこそではなからうか。体が発達し、

知恵も発達し、そのけんか行為もより激しくなるが、その激しさの中でも、そろそろけんかの大義を意識しつつあるのではなからうか。また、それをどう意識し、さらにどう態度決定するか、

つまりどう構え（身構え、心構え、口構え）をとるかによって、「いいかっこうをつくら」れるか否かが決まるとしているのではなからうか。

六年生の姿

—— 定義・達観の芽生え ——

先述の六年生の構え意識は、さらに、定義・達観へと結び付くようにも思われる。

六年生の事例の特徴は、他学年に比し、類別上、どこにも入れられないようなものが、多く、けんか意識が多岐

にわたっているということである。他学年での類別に関連しながらも特徴的なもの、あるいは、六年生独自のもの、それに近いものを列挙すると、

A 「正当性の主張」

B 「強がり」

C 「悪友」

D 「勇気」

E 「ひきょうなまねは自分がおちぶれるからやらない。」

F 「度胸」

G 「こらしめ」

H その他

等々であるが、この学年で初めて優位性において出現するのが、「こらしめ」「正当性の主張」「かっこうをつける」である。

五年生（十一才児）で、「正当性の主張」に類似して、「主義を主張する」「知恵のある方が勝つ」等があるが、

学年内の意識の優劣度において選定できる場所に位置付かない。六年生（十二才児）において、わずか一例であるのに選定できるのは、六年生（十二才児）の事例が先述のように多岐にわたるためであるが、たとえそうであるにしても、この三つの事例は、六年生（十二才児）で初めて出現すること

を、この学年の特徴としてとらえておきたい。

けんかについて、「正当性の主張」にその意義を見つけ、そのけんか行為の効能において「こらしめ」という意義を見つけようとする姿勢がうかがえるので指摘しておきたいのである。

「かっこうをつける」「強がり」だのと、ポーズそのものを見てとる意識の芽生えの核が、その姿勢や視点の取り方において、この三つの事例に見られそうだと考えたいわけである。六年生（十二才児）の子どものけんかポーズの理想は、「正当性の主張」をひとつの意義付けの基準とし、多少の感情的なぐずつきを見せながらも、「意味のあるけんか」をする姿勢なのである。

策を弄して逃げることを考えながらも、卑怯な振舞いは自分をふがいなくさせることも知り、だからこそ、攻撃手段としては、即戦即決性が重んじられ、相手が暴力をふるわない限りは自らは暴力をふるわないと自己の構えを規定する。このように姿勢を意義付けているからこそ、素直にあやまれないこと、あやまるのには、とことん戦うこと、勇気・度胸が必要であったりするのであらう。

換言すれば、他学年がポーズ意識においてどこかの類の優位性が鮮明であることでその様相を考察できたのに比

し、六年生では、まだまだの感はあるにしても、ひとつのポーズ意識をまとめようとするには、他学年よりも多くの類を駆使しなければならないということであり、延いては、それが、六年生（十二才児）のポーズ意識の特徴となるのではなからうか。

人としての成長を考える際、理想的な心境からすれば、まだまだの成長を期待しなければならぬが、少なくとも、けんかをひとつの意義付け、定義付けのもとにとらえようとし、そこに達観的な姿勢（現時下の自己処理）をとろうとしている芽を見つけることができるように思えることにおいて、本考察の位置付けとしたい。

拙論が、基礎資料の量、集計方法の検討等々まだまだ検証の要ありとする故に仮説的考察としたところであるが、少なくとも、従来、子どものけんか行為が子育て上で饕餮論的善悪論的な扱いを主としてきたことに対して、子どもたちのけんかポーズ意識を追うことによって、饕餮論的善悪論のみの対象としてだけでは扱いきれない子どもたちの成長の芽ぶきを垣間見ることができたように思える。

(57・4・18)

(横浜・汐見台小・教諭・飯住良夫)

(東京・月光原小・教諭・石本 栄)